

8612 ニューヨークには奇想天外な人間が・・・

ニューヨークには奇想天外な人がたくさんいました。どう頭を捻っても何をしてどうやって生活しているのか、皆目見当がつかない人、あるいは映画や本のファッション・モデルやギャングの手下のイメージそっくり過ぎて本当には思えない人、華美な服装に埋もれた荒廃した表情、何だかカーニバルのような人の波であった。

あの群衆を見ていると、ニューヨークのあらゆる可能性、成功から失敗への極端な振幅が確かに信じられた。

ハロラン 芙美子：ワシントンの街から

[許容訳例]

There were a lot of the most extraordinary people in New York: people as to whose work and ways of life, however I beat my brains, I had not the faintest idea; people who looked so much like fashion models or gang underlings in movies or books that I could hardly believe them real; people whose ravaged expressions were buried under showy cloths; all of it seemed somehow like a crowd of figures in a carnival.

Watching the crowd, I was convinced of the infinite possibilities of New York, of the extreme range from success to failure.

[翻訳例]

New York was full of the most unlikely people. People as to whose occupations and ways of life one had not the faintest idea, however one racked one's brains; people who looked so exactly like the stock idea of fashion models or petty gangsters in movies or books that they hardly seemed real; people whose ravaged expressions were buried beneath showy cloths: wave after wave of people, like figures in a carnival.

To watch the crowd was to be convinced of the infinite possibilities of New York, of the extreme range from success to failure there.

■ニューヨークには奇想天外な人間が沢山いました。 (8612)

★「ニューヨークには」は in New York です。

★「奇想天外な」は「奇抜な(人)」という意味なら *bizarre* があります。また「いろいろ想像してもそこまではありそうもない(思いもよらない)人たち」という感じなら the most unlikely people であり、「まったく思いもしないような」とか「まったく常識的には考えられない・普通でない」と考えるなら the most extraordinary people です。なお、辞書には *amazing* が出ていますが、これは「よくできる天才的な人」というような、どちらかと言うと好ましい方の意味に用いるものですから、ここでは使えません。また、*unique* もいい方の意味になりますから、ここでは使えません。*unheard-of* は event; episode; fact などに使

うもので、「人」に対しては使いません。それから totally unexpected は「(まさかこんなところで会うとは)夢にも思わない・思いもよらない」という意味で、ここでは使えません。

★「～が沢山」は a lot of ~とか full of ~です。

●文構造 (～には～がたくさんいました)

「ニューヨークには奇想天外な人間が沢山いました」ですが、「いました」という言葉から、「行ってみたら…でした」というニュアンスが感じられるので I saw…とか I found …も考えられますが、There were ~ in New York. にもそのニュアンスが含まれているのでわざわざ言い換える必要はないと思います。また、「ニューヨークには～がたくさんいた」という事実表現ではなく「ニューヨークには～がたくさんいました」という回想的なニュアンスを強調したいなら New York was full of ~. という構造がいいでしょう。この構造には、ごく自然に When I arrived in New York, I found that it was full of ~. のニュアンスが含まれています。

■どう頭を捻っても何をしてどうやって生活をしているのか、皆目見当がつかない人、あるいは映画や本のファッション・モデルやギャングの手下のイメージにそっくり過ぎて本当には思えない人、華美な服装に埋もれた荒廃し表情、何だかカーニバルのような人の波であった。 (8612)

★「どう頭を捻っても」の「頭をひねる」には rack one's brain(s) という決まり文句があります。これを使うと「どう頭を捻っても」は however one racks one's brain(s) となります。ほかに beat one's brains という表現も使うことが出来ます。ただし、beat one's brains out は「頭を叩いて脳みそを出す」というニュアンスになってしまって、ここでは使えません。

★「何をしてどうやって生活をしているのか」は、「どんな仕事をして、どのように生活しているか」ということですから what they do and how they live です。

★「皆目見当がつかない」は have not [do not have] the faintest [slightest] idea (of) ~とか have no idea(of) ~とか、あるいは、nobody could form any idea (as to) ~ です。wh-節・句が of; as to の目的の場合、通例 of; as to は省かれます。また、just cannot imagine でもいいでしょう。

★「映画や本」は in movies and books です。

★「ファッション・モデル」は、people が主語ですから fashion models と複数にします。

★「ギャングの手下」は gang underlings とか petty gangsters(チンピラ)ぐらい。

★「～のイメージ」は the image of～でもいいですが、the stock idea of～(～について誰もが抱いているようなイメージ)の方が具体的で、たとえば、He is the stock idea of a Japanese. (彼は(誰もが持っているような)日本人のイメージにそっくりだ) のように使います。

●「隠れ連体修飾節」の [の]

「映画や本 [の] ファッション・モデルやギャングの手下」は簡単に the fashion models or [and] petty gangsters in movies or books でいいのですが、ここの [の] は「～の中で見られる」を端折った言い方なので、英語では「名詞(the fashion models or [and] petty

gangsters) + 関係詞節((whom) one gets from movies or books)」と言ふことも出来ます。また「～の中で描かれた」と考へると「名詞(the fashion models or [and] petty gangsters) + 関係詞節((who are) portrayed in movies or books)」とすることができます。そうすると the image とか the stock idea を使わないですみます。

★「そっくり過ぎて本当には思えない」は「あまりにも～にぴったり似ているのでとても本当とは思えない」ということですから look so exactly like…that they hardly [don't] seem real でしょう。exactly like は‘そっくり’と言うときによく使われる言い方です。他には look so much like…that one can hardly believe them real など。普通、「(そっくり) すぎて・・・」という意味は just like…でも表すことが出来ますが、ここでは so があるので使えません。また、「そっくり」に the spitting image of…という表現がありますが、これは、たとえば, He is the spitting image of his father [brother].のような場合にしか使いません。

★「華美な服装に」は「華麗な・華やかな」という意味だけでなく「派手な」というニュアンスが強く含まれていると思われるので beneath [under] showy [splendid] clothes ぐらいでしょう。普通, splendid には悪い意味のニュアンスはないのですが、ここでは下の「荒廃した」との対比によって「派手な」というニュアンスが出てきますから使えます。gorgeous は広告などでよく使われる言葉ですが、何か主観的なニュアンスが入り、「絢爛豪華な」という大げさな感じで、ここでは使えません。

★「服装」ですが、ここではファッショ・モデルだけではなく男も含まれるので cloths です。dress は可算名詞として使う場合は「女性のドレス」であり、そうでない場合は、抽象名詞として、たとえば, He is always careful about his dress.(身だしなみに気を使う)のように使います。ここの「華美な服装」というのは抽象名詞ではないので、ここでは使えません。

★「埋もれた」は be buried しかないです。

★「荒廃した表情」の「荒廃した」に一番いいのは ravaged だと思います。ravage は‘荒廃させる’という意味で、たとえば, The countryside was ravaged by war.とか The crops were ravaged by the storm.のように使います。つまり、laid waste と同じような意味になります。

「人」の場合には、たとえば, His face was ravaged by time.のようになりますが、ravaged face というと、たとえば、いろいろと大変なことがあったとか、ストレスとか病気、あるいは麻薬などの影響がさまざまと表れている顔、ということになります。なお、辞書には「荒廃した」に dilapidated が出ていますが、これはよく house に用いて、あちこちペンキや壁紙がはげているという意味になる言葉で、文学的に「人」に使えないことはありませんが、普通ではありません。また、ruined は、何か具体的な事柄がきっかけとなって「完全にだめになってしまった」という場合に用いるもので、ここでは使えません。

★「表情」は expressions です。なお、appearance という意味で look も使えなくはないのですが、look にはいろいろな意味があり、たとえば、「視線」という意味にもなり、あいまいなので避けた方がいいでしょう。

●三つの「連体修飾節+体言」の処理

「どう頭を捻っても」以下の文は、すぐ前の「奇想天外な人間」を具体的に説明したもので、「・・・見当がつかない人」「・・・本当には思えない人」「・・・荒廃した表情(△の人)」と三つの「連体修飾節+体言」が並んでいます。この処理には、

- ① 前の文章の後をコロンにして、次の三つの部分の後にセミコロンを使う方法。
- ② コロンの代わりにダッシュを使う方法。
- ③ いったん前の文章を切って、次もまた people…; people…; people… と動詞なしで切っていく方法。(ただし、これは広告やコマーシャルなどに使われすぎて、下手をすると安っぽい感じになります。)

の三つの方法があります。

●「連体修飾節+不定代名詞的体言」(「どう頭を捻っても」以下の、三つの連体修飾節)

1. 「どう頭を捻っても何をしてどうやって生活をしているのか、皆目見当がつかない人」は「連体修飾節(どう頭を捻っても何をしてどうやって生活をしているのか、皆目見当がつかない) + 不定代名詞的体言(人)」です。英語では、基本的には「名詞+関係詞節」で変換するのですが、「何をしてどうやって生活をしているのか」の「のか」と「皆目見当がつかない人(people)」をどう結ぶのか問題になります。関係代名詞を使うとすれば people with whom…とする方法があります。この場合の with whom は in the case of whom ということで、つまり、with [in the case of] such people ということになります。これを使うと people with [in the case of] whom, however [no matter how] I racked my brain, I had not [did not have] the faintest [slightest] idea what they did and how they lived.のように、先ほどの文をそのまま後に続けることが出来ます。もう一つの方法は、先ほどの what they do and how they live の動詞を名詞化して their occupations and ways of life として people as to whose occupations and ways of life とする方法です。つまり、people as to whose work and ways of life, however I beat my brains, I had not the faintest idea とか、people as to whose occupations and ways of life one had not the faintest idea, however one racked one's brain です。この as to は、たとえば、I have no idea as to his occupation.と言えば Concerning what his occupation may be, I have no idea.というニュアンスになります。結局、上で述べた people with whom… と people as to whose…の二通りの形しかないと想いますが、どちらかと言えば、英語としては後者の方が優れていると思います。

2. 「映画や本のファッション・モデルやギャングの手下のイメージにそっくり過ぎて本当には思えない人」の構造は、「映画や本のファッション・モデルやギャングの手下のイメージに(あまりにも)そっくり(△な)人」と「あまりにもそっくり過ぎて本当には思えない」が組み合わされています。つまり前半が「連体修飾節(映画や本のファッション・モデルやギャングの手下のイメージに(あまりにも)そっくり(△な)) + 不定代名詞的体言(人)」ですから、英語では「名詞(people) + 関係詞節(who look like fashion models or gang underlings in movies or books)」になり、そこに「あまりにも(so much/ so exactly)」を挿入して「・・・なので(that)・・・」で限定するという形になります。すなわち、people who

looked so much like fashion models or gang underlings in movies or books that I could hardly believe them real/ people who looked so exactly like the stock idea of fashion models or petty gangsters in movies or books that they hardly seemed real です。

3. 「華美な服装に埋もれた荒廃した表情」

「華美な服装に埋もれた荒廃した表情」には「の人」を補って「連体修飾節（華美な服装に埋もれた荒廃した）+名詞（表情の人）」とします。そうすると、英語では「名詞(people) +関係詞節(whose ravaged expressions were buried under [beneath] showy cloths となります。

★「何だかカーニバルのような人の波であった」は「奇想天外な人間が沢山」 = 「今具体的に述べたような三種類の人々」をまとめて「何だかカーニバルのような人の波」と言い換えたわけですが、この「人の波」は一つの波ではなく、後から後から打ち寄せてくる波という意味で、「奇想天外な人が波のように（横に広がって）、次から次に押し寄せてくるカーニバルの時の行列のように」と言っていると考えることができます。したがって、この個所は「波のような人は（まるで）カーニバルの時の人の姿のようであった」と考えると、…; waves [wave after wave] of people like figure in a carnival とか all of it seemed somehow like a crowd of figures in a carnival と書くことが出来ます。この figure という言葉は、生きて動いていることはわかつても、人間としての個性がない場合に用います。なお、a crowd of people at a carnival というと「カーニバルを見物している人々」という意味になってしましますから、前置詞は in です。

■あの群衆を見ていると、ニューヨークのあらゆる可能性、成功から失敗への極端な振幅が確かに信じられた。 (8612)

★「あの群衆」は「ニューヨークの群衆」で、 the crowd か the crowd of people です。

★「(あの群衆を)見る」には「動いているものを見る」という意味ですから watch (the crowd) です。

★「ニューヨークのあらゆる可能性」は the infinite possibilities of New York と phrase にすらか、あるいは there are infinite possibilities in New York.とするかです。「あらゆる」は、辞書には all; every; all sort of などが出ていますが、ここでは「無限の；計り知れない」という意味の infinite がいいと思います。

★「成功から失敗への極端な振幅」は the extreme range from success to failure あるいは the extreme range between success and failure[from success to failure] ぐらいです。「振幅」は辞書には amplitude が出ていますが、電気・物理などの専門用語として使う場合以外は‘幅の広さ’あるいは‘豊かさ’など充実性に重点をおいた意味になります。たとえば、the amplitude of her bosom というと、「いかにも充実した豊かな胸」ということになります。ですから、ここは range ぐらいでいいと思います。

★「確かに信じられた」は I could believe~とか I was convinced of ~でいいと思います。なお、「確かに」に surely は使えません。surely は、多くの場合、相手に確認してもらおうと

いう意図で使う言葉です。たとえば、I was surely able to believe…を直訳すると「…と信じることが出来るのではないか」ということになります。

●格助詞「と」(同時・因果)の解釈

「あの群衆を見ている〔と〕、ニューヨークのあらゆる可能性、成功から失敗への極端な振幅が確かに信じられた。」は、格助詞「と」の解釈によって二つの構文が可能です。一つは「同時」(二つの動作がほとんど同時、あるいは継起的に起きる。たとえば、窓を開けると、小鳥の鳴き声が聞こえた。)と解釈すると「あの群衆を見ている〔と〕、私は～を信じることが出来た」は分詞構文を使って Watching the crowd (of people), I could believe…です。もう一つは、たとえば、「風が吹くと、桶屋がもうかる」のような「因果」(ある動作がきっかけとなって、次の動作が行われる)に解釈すると、To watch the crowd was to be convinced of ~です。筆者が表に現れていないこの文章では、I を使わない後者の方が適当と思われます。